

エネルギーに生きんとする點に多大の好意と尊敬の念を贈るべきであらう。

本叢書は西岡氏の「新日本史總説」以下、大體時代毎に經濟・政治・思想・文化と特殊専門の歴史を執筆者各自が擔當せるもの。その第一回配本「近世政治史」をみるに近世政治の特質、徳川幕府政治の成立・幕府官僚の構成・所謂文治政治の展開・幕府政治の停頓・幕政の崩壞過程・結論と大體概説的な構成の下に諸章を立て、近世封建社會に於ける政治形態の特質を以て、封建社會存立の物質的基礎たる農民謀求の合理的遂行、及び斯かる封建社會を根柢より動搖せしめる所の近世的商品經濟に對する爲政者の政策にありとし、封建制再編成者としての信長・秀吉より家康の登場及び鎖國の實現によつて完成せられた近世封建社會も將軍家綱より實經に至る四代の文治政治、吉宗・家重・家治三代の幕政停頓時代を経て徐々に崩壞の過程に入り、松平定信等の補強工策にも拘らず天保改革の失敗によつて「近世的政治支配の基礎は全面的に分解」せんとする機運に向つた、とする。著者吉村氏の抱く社會發展の理論はまことに明快、社會の下部構造との聯關に於て、政治形態の推移發展の必然性を示さんとする主張は、全敘述を通じて最も著しく看取される所である。著者吉村氏は最近東大國史科出身の新鋭と聞く。此の大著を手際よくまとめられた手腕は實に偉とすべきであるが、全編を通じて聊か公式主義的な安易さが存在はしないか。殊に後半本論を天保改革に絶ち、以後幕政の没落・版籍奉還に至る過程に關して僅かに十頁を費したに過ぎない點は、一面に於て眞の意味に於ける封建社會の潰滅が政治的にも亦祿制

の廢棄にある事を思ふ時、全敘述の體制の上に少しく不安を感じざるを得ない。

けれども本書の期す所が態度の眞面目さにあり、若き學徒の清新なる主張に在りとすれば、斯く完結せられたる概説的政治史はそれ自身としても尙此の道の入門者にとつて好參考書たるを失はないであらう。唯本叢書は二十數氏の共同勞作によつて「新體系の樹立を翹望」するもの、我々は執筆者各位が眞に統制ある組織の下に、舊文化史に於ける百味筆筒の寄合所帯の無力さを尅服して、所期の目的を實現せられん事を冀望するものである。(東京・内外書齋發行、四六版、三〇二頁、每冊壹圓五拾錢(以上内藤)

○滋賀縣八幡町史綱要

福尾 猛市 郎 著

近江商人の本場として、我國近世の經濟史上特異の地位を占める滋賀縣八幡町にあつては、數年來町史の編纂を企圖し、福尾學士に囑して史料の蒐集整理に力を盡しつゝあつたが、昨今漸くその編纂の緒につかんとするに當り、まづその概要を取纏めて町史綱要の名を以て公刊せらるゝことゝなつた。この書は學士が同町實業學校生徒の爲に講述せられたところの町史の議案を骨子とせるものであつて、その敘述は極めて平明に、淡々として太古より明治初年に至るこの地變遷の跡を述べてある。その讀者として豫想せられてゐるところは當の町民にあるのであらうが、我々一般人にとつても極めて興味深く、菊判一〇四頁の分量も通讀には誠に頃合ひである。近時諸方に於て編纂される地方誌が往々にして

専ら精細詳密を旨とし徒らに大なる巻帙を成してその實何人にも讀まれざる史料集成に墮し去つてゐるのを見るとき、却つてかくの如き小冊子の實地に有つ意味の重大さを思はざるを得ない。筆者はこの「綱要」が全八幡町民をして眞に町史編纂の意義を自覺せしめ、その困難なる事業の完成の爲に一致協力するに至らんことを期待するものである。(菊判附録年表共 一一八頁、圖版五葉、地圖二葉附、八幡町役場發行、非賣)

○軍事史研究の創刊

今回陸海軍將校の有志の間に新に軍事史學會なるものが設けられて、年六回雜誌「軍事史研究」が發行せられることになつたに就つて、廣く一般史學研究者の賛同助成が求められてゐる。その趣旨とするところは、軍事史の部門に立つて建國の本義を明らかにし以て史學本來の使命を達せんとするにあるといふ。もとより特に軍事史なる一部門の薪に一般歴史研究の中に設けられようべきものとは考へられないが、平素事に軍に従ふ人々が、その關心するところを通じて歴史の研究に進み入ることはそれ自身好ましいことであり、その趣旨の眞に達成せらるゝことは誠に賀すべきことではなければならぬ。筆者はその同人達が歴史研究に於てはまづ偏見を去り先入主たるものを取除くことが第一義なることを終始忘れず、一般歴史家達も亦進んで之に協力し眞に歴史的なるもの、理解を得んとする人々の要求に應へるところがあらば、かかる學會の創立もその意義の甚だ大なるものあるべきを思ひ、その將來の爲衷心の祝意を表するものである。左に創刊號の内容を紹介し

よう。

白砲術の傳來と日蘭の國交
隠れたる兵學者竹内秀明

蘭學者小關高彥傳

史料——永祿八年築城記附解説

(東京市芝區二本榎西町三番地軍事史學會發行、會費年額三圓)

(以上柴田)

○現代支那概論

文學博士 矢野仁一 著

動く支那・動かざる支那

著者は本書の序文に於て、支那問題の複雑性は世界歴史の大勢と支那自身の歴史の傳統とが同時に支那に働きつゝある結果によるとされ、現代支那を理解するには變動的發展的時局的な事象と舊態依然たる本質的な部分との二面的考察が必要であると述べられて居る。かゝる見地に基き本書はその變動的、時局的なものに關する論究を蒐めて「動く支那」と題し、本質的な問題に就いては「動かざる支那」と名付けて居る。

先づ内容を見るに「動く支那」に於ては傳統的な道德的國家組織乃至國家觀が世界史の大勢に應じ或は應じきれずして崩壊しつゝある迹を尋ね、邊疆問題、北支問題等主として對外的な事件を取扱つて居る。著者に據ると蒙古西藏等は清朝即ち滿洲朝廷の領土ではあつたが支那の領土ではなく、此等の地方と支那との關係は滿洲皇帝を通じての同君聯合の關係に過ぎない。それ故清朝が滅